

山と博物館

第53巻 第7号 2008年7月25日

市立大町山岳博物館



ニホンカモシカの 赤ちゃん誕生!

平成20年7月9日、山岳博物館付属園でニホンカモシカの赤ちゃんが産まれました。出産したのは愛称「オタリ」（4歳）で、昨年12月の最終交尾より7ヶ月の妊娠期間を経ての出産でした。山岳博物館では2005年以来、3年ぶりのカモシカの赤ちゃん誕生です。

「オタリ」は父親の「ハクバ」が興奮し、飼育管理や出産にも影響が出る可能性があったことから、5月19日に別居をしました。通常カモシカは、出産直前にならないと外見上の妊娠判断が難しいとされています。6月16日には乳房が膨らんできているのが確認できたことより、妊娠していることがほぼ確定できたため、飼育場には4台の監視カメラを設置、終日行動観察が出来るようにして出産に備えました。「オタリ」は7月8日より落ち着きがなくなり、飼育場内を歩き回るようになりました。翌9日午後4時30分頃、出産が始まっているのに気づき、午後5時39分元気な赤ちゃんを出産しました。初産ながら順調な出産でした。赤ちゃんは産まれて40分後には自分の足で立ち上がり、翌朝には元気に乳を飲んでいく姿が確認できました。

近年、母親が仔を育てる自然繁殖では生後数ヶ月までしか生存できない例が続いていたため、今回は今まで以上に親仔の観察、健康管理に力を注ぎ、すくすくと育ててくれることを心から願っています。

（山岳博物館飼育員

飯島志津・岩本尚也・上良智）

黒部に逝った信州の名猟師小林喜作 カモシカの宝庫棒小屋沢

伊藤 達夫

生涯に熊三〇〇頭、カモシカ二〇〇〇頭を獲ったと言われ北アルプス一の猟師であった小林喜作は、大正十二年（一九二三年）三月五日、カモシカ猟のために入山していた後立山連峰の西面、黒部川支流の棒小屋沢で雪崩によって遭難死した。この遭難については、山本茂実が、生存していた関係者ほぼ全員への聞き取りを含む克明な取材に基づき、『喜作新道 ある北アルプス哀史』（昭和四六年、一九七一年刊行）を著したことによって、その全貌が広く知られている。

現在でも一般登山道ではなくバリエーションルートとされる槍ヶ岳北鎌尾根の初登攀の案内人を務めたことや、大天井岳から槍ヶ岳へ抜ける登山道（喜作新道）を開削したことからも分かるように、小林喜作は、腕利きの猟師であっただけでなく、登山ガイドや山小屋経営者としてもその才能を発揮した。

喜作のこれらの活動と成功は、その身体的能力の高さだけでなく山岳自然に対する豊富な知識がその基礎になっていたことは間違いない。筆者が登山者として小林喜作に畏敬を感じる理由はまさにこの点にある。大自然の力を前に己の弱さを感じるとき、登山者は山についてもっと知りたいと願う。

遠山品右衛門と喜作

小林喜作と棒小屋沢について語るときに、遠山品右衛門を抜きにすることはできない。嘉永四年（一八五二年）、信州安曇郡野口村（現長野県大町市平）に生まれた品右衛門（本名は里吉）は、明治政府の発足によって加賀藩の黒部奥山廻役が廃止された直後から針ノ木峠を越えて黒部川流域に入り、獣を獲り岩魚を釣った。そして、一帯を熟知していたことから「黒部の主」と呼ばれた。

喜作と品右衛門は世代が異なる。喜作が野口村より約二十km南の西穂高村（現安曇野市穂高）に生まれたのは、明治八年（一八七五年）、その二年後に品右衛門の長男作十郎が生まれているから、二人には親子の年齢差がある。針ノ木峠を境に南北に分けられる猟場についても、喜作は「南」、品右衛門は「北」であったが、二人は親交を結んでいた。

喜作は、「北」の猟場に入るときには必ず行き帰りに手土産（多くの場合熊やカモシカの肉）を持って品右衛門を訪れ、猟の話をしていったという。猟師の間で「カモシカの巣」と呼ばれた棒小屋沢について喜作に教えたのは品右衛門だったと伝えられている。

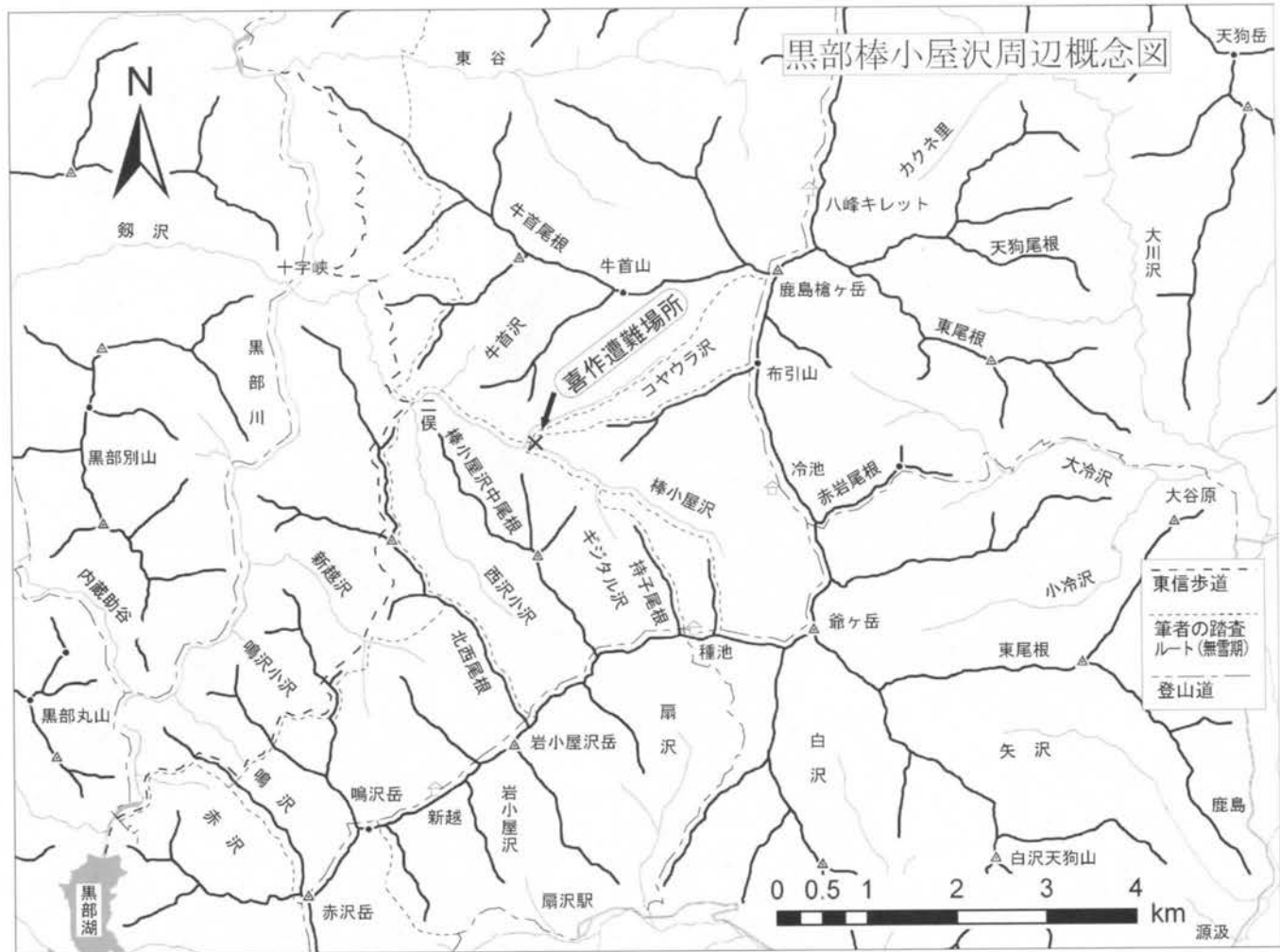


小林 喜作

陸軍参謀本部陸地測量部や日本山岳会の権威によって背景に押しやられていたが、彼ら猟師たちこそ明治大正期の北アルプス開拓の立役者であり、小林喜作はその象徴である。その喜作が命を落とした棒小屋沢は、今では訪れる猟師や登山者もなくなくなり、再び未知のベールに包まれようとしている。小林喜作の遭難を通して、棒小屋沢と人との関わりの歴史を振り返ってみることは、登山者による山岳自然の把握というテーマについて考える上で意義があると思われる。



劔岳山頂から見た棒小屋沢（中央下の白く見える河原の広くなったところがコヤウラ沢の出合で喜作の遭難場所）



喜作一行が就寝中に雪崩に遭った棒小屋沢とコヤウラ沢の合流点は、後立山の布引山から伸びる尾根の末端にあたる。そして当時、この尾根をわずかに登ったところには、品右衛門の猟小屋があった。喜作たちが雪崩に対してはるかに安全であったこの小屋をなぜ使わなかったのかは、謎とされている。

品右衛門は、この遭難に先立つこと三年、喜作新道が開通した年にこの世を去った。

大正期の黒部と棒小屋沢

北アルプス黒部川流域の開拓は、山林局による森林資源調査、陸地測量部による地形図作成、地質調査や鉱物資源の探索に加えて、水力発電の電源開発のための調査を原動力として、明治後期から大正期にかけて一気に進んだ。

棒小屋沢をめぐっては、鹿島槍ヶ岳に二等三角点が設置されたのは明治三五年（一九〇二年）、牛首尾根と棒小屋沢中尾根に三等三角点が設置されたのが明治四十年（一九〇七年）であり、電源開発では、大正八年（一九一九年）に奥山廻のルートを使って南越から東谷に達し、黒部川に下った古河合名会社の探検隊が十字峡に到達している。これは、この十字峡の命名者であり、黒部を広く探勝し世に紹介した冠松次郎らの到達の六年前のことである。東信電気が黒部川右岸に東信歩道を拓いたのは大正十四年（一九二五年）である。この歩道の棒小

屋沢二俣から上流側の開削を請け負ったのが遠山品右衛門の息子たちであった。冠松次郎は棒小屋沢を何度も訪れ、二俣から上の本流やコヤウラ沢、中尾根、東信歩道を歩き紀行文を残している。

これらの探検調査の多くはこの地域をよく知る猟師の案内によって行われた。つまり、猟師や柚人たちはずっと以前から後立山を越えて棒小屋沢周辺でも活動していたのである。棒小屋沢には、品右衛門の小屋があったし、現在の種池小屋付近から落ちる尾根は持子尾根と呼ばれていた。持子とは荷物を運ぶ人のことである。またその西側のギジタル沢は、猟師義十が落ちて死んだタル（滝）があることに由来する。喜作たちの遭難以前にも、コヤウラ沢で信州の猟師三名が雪崩によって亡くなっている。猟師として喜作が特に特異であったわけではなく、猟師の活動は夏冬問わず北アルプスの全域に及んでいた。

棒小屋沢は、猟師たちの狩猟の場であっただけでなく、喜作の死の直後からほんのわずかの期間であるが、登山の対象としても注目された。その背景には、冠松次郎の精力的な執筆活動と当時の登山ブームがある。

昭和六年（一九三一年）には、陸地測量部から登山者用の五万分の一集成図『白馬嶽及立山近傍』が発行された。昭和九年（一九三四年）に三省堂が出版した『北アルプス』の付図には東信歩道が描かれ、棒小屋沢が東信歩道と鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳を結ぶ登下降路として紹介されている。この本は、改訂を重ねて昭和十七年まで発行されていた。また『登山とハイキング 白馬岳・立山・黒部峡』（地人社・昭和十年）の付録の「エクスカーションマップ」には東信歩道が登山道として記入さ

れているだけでなく、棒小屋沢の品右衛門小屋が山小屋マークで示され、本文中には収容人員八名の小屋として紹介されている。

喜作遭難の地を訪ねる

今はまた深い静寂が戻っている棒小屋沢には、喜作がカモシカを追い、冠松次郎が逍遙したときと変わらない風景が残されている。この棒小屋沢にも黒四ダム開発の影響は及んでいるが、ここを訪れることによって現代の登山で失われたものを感じることができ



喜作遭難の地（手前が棒小屋沢、奥がコヤウラ沢）

剣岳の小窓あたりから眺めるとよく分かるが、棒小屋沢は、黒部川と合流する下流部の激流とはまったく異なり、その中流部では広々とした河原を穏やかに流れている。二〇〇六年の九月下旬、喜作遭難の地を見ようと棒小屋沢に向かった。よく整備された柏原新道を登って種池小屋に出る。棒小屋沢には持子尾根よりも幾分標高差の小さい一つ爺ヶ岳寄りの尾根を降りることになった。種池平と呼ばれているところから稜線と並行する草地を横切って小さなコブを越えて尾根に入るとヤブ漕ぎは思ったほどではなく、労せずして棒小屋沢に降り立つことができた。

翌日はのんびりとした河原歩き。ギジタル沢の出合を過ぎると河原の幅はさらに広がり、やがて右岸から多量の土砂を押し出してコヤウラ沢が合流する。その名は、もちろん稜線の小屋の裏手に源を発するからではなく、品右衛門の小屋の裏を流れていたことに由来する。ここが喜作たちが雪崩に埋まった場所だ。そこから尾根に取り付いて

品右衛門小屋の痕跡を探した。冠の記述(『黒部溪谷』)と合わせてその場所はほぼ特定できたが、証拠は見つからなかった。周囲の古い切り株は、黒四工事に関係するものかもしれない。

棒小屋沢の本流にはコヤウラ沢の出合のすぐ下に堰堤が築かれていて、川底の鋼鉄製のスリットを通して水流はすべてトンネルに導かれていく。堰堤を巻いてさらに下ると牛首沢が合流する。そして、右岸を進むと河原はいつの間にか林道となり本流にかかる橋の上に出て、下流を見ると西沢小沢が合流している。ここには黒部トンネルへの入り口がある。

この棒小屋沢の二俣は、東信歩道開削の拠点となった場所で、工事を請け負った品右衛門の息子たちがここから上流の平に向かつて道を付けた。下流からここまでの道に見られる等高線に沿った強引な土木工事とは異なり、この地域の地形について精通していた彼らのルートは尾根と沢を巧みに繋いでいる。ここから来た道を引き返し、翌日、冷池に登り返し爺ヶ岳を越え柏原新道から下山した。

棒小屋沢と鹿島槍ヶ岳

翌年七月、再び棒小屋沢を訪れた。今度は持子尾根を下つてみることにした。この尾根の出だしには種池小屋の給水設備を維持管理するための歩道がある。この道が尾根を外れギジタル沢に向かうところからヤブ漕ぎが始まる。この尾根は悪かった。最初のうちこそなだらかだったが、やがて細く急峻になりどうしても尾根上を辿れず、急斜面を滑り落ちるようにしてギジタル沢の雪溪に降り立つ

た。コヤウラ沢に入ったところにベースキャンプを置いて、鹿島槍へ小雨の降る中をアタックした。この沢は水量も少なくさしたる悪場もない。幾つかの小滝を越え崩壊した雪渓を過ぎると屈曲点となり奥に滝がある。ここだけは水流通しに通過できず右岸のヤブを登って上流側に降りた。水流がなくなつてからもヤブ漕ぎはほとんどなく、凹状部を繋いで登り牛首尾根に出て鹿島槍ヶ岳の南峰に立った。

帰路には布引岳からの尾根を使った。ガラク場を下りハイマツ帯となつたところで最短距離を横切つて尾根の左側の斜面に出る。そこは積雪が遅くまで残るために樹木が育たず草地となつている。その草地をトラバースしながら下り、尾根上が針葉樹林となつてきたところでその中に入って熊の道を通る。その踏み跡は、この尾根では格別に明瞭で、多くの人は登山道だと信じるだろう。特に苦勞することもなくテントに戻ることができた。品右衛門がこの尾根に狐小屋を構えた理由が分かったような気がした。(つづく)

(京都府立大学助教)

山と博物館 第53巻 第7号

発行 二〇〇八年七月二十五日発行

〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六-一
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六-一三三-〇二二一

FAX 〇二六-一三三-〇二二二

E-mail: sanpak@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpak

印刷 有限会社 北 辰 印刷

定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五四〇・七・一三三九三